

巻頭言

本書は、臨床の麻酔科医が基礎的知識のアップデートを十分に行えていないと思われる「オピオイド」について、基礎と臨床の“橋渡し”の一冊となるよう企画した。橋渡しというコンセプトは、2018年の別冊秋号で『疼痛と鎮痛』としてまとめたものを踏襲したものである。

本書は、臨床編、基礎編、社会編の3部で構成した。今ではレミフェンタニルを使わない術中麻酔管理は考えられないかもしれない。しかし、その登場以降、術後シバリングや痛覚過敏が関心を集めるようになってきた。また、オピオイドの術後副作用である悪心・嘔吐やかゆみ、呼吸抑制などに対する予防と治療についても知識をアップデートしておきたい。さらに、小児麻酔や集中治療、近年ではがん性疼痛患者だけでなく慢性疼痛患者でもオピオイドは頻繁に使われており、ペインクリニックでのオピオイド使い方も知っておきたい。臨床編では、そういった患者に対するオピオイドの使い方を取りあげている。さらに米国でのオピオイドクライシスが知られるようになり、それによってオピオイドフリー麻酔が注目を集めている。オピオイドフリー麻酔の米国での現状や今後の日本での可能性についても述べられている。

臨床でオピオイドを使用するにあたっては、やはり基礎的なオピオイドの知識が必要である。基礎編では、オピオイドの鎮痛作用機序をはじめとし、オピオイドの依存や痛覚過敏、情動・報酬系、免疫系への影響および遺伝子やがんとの関係についても述べられている。がんサバイバーや慢性疼痛患者のオピオイド長期使用患者が増えている中、このような基礎的知識が、上記のような臨床面の理解のベースになるだろう。

最後に社会編ではオピオイドの歴史、米国でのオピオイドクライシスや日本での現状、さらに日本での医療用カンナビノイド・大麻の可能性について取りあげた。

術中の麻酔管理、術後鎮痛、ペインクリニック、緩和医療など、日常診療で当たり前のように使用されているオピオイドについて、利点・欠点、基礎的な鎮痛などのメカニズム、またその進歩について、復習と新たな学習の機会としていただきたい。

国際医療福祉大学 成田病院 麻酔・集中治療科

河野 達郎